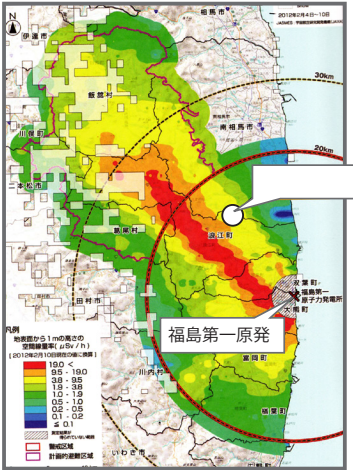
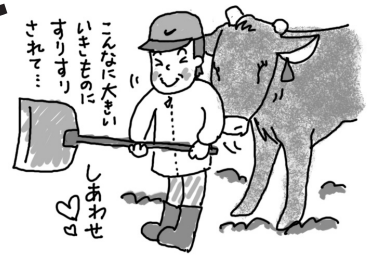


絶望ばかりの警戒区域で 「希望」を育てている 牧場がある！



ごみ・環境ビジョン21 理事 井上真紀子



今年3月11日の深夜0時過ぎ、ごみかん理事仲間の江川さんと私は、東京駅八重洲口から福島駅行きの夜行バスに乗り込みました。

そのひと月ほど前にごみかんが主催した『3.11から2年～福島と多摩をつないで』を手伝ってくださったUさんに誘われて、東日本大震災から2年目の3.11を、福島県浪江町の「希望の牧場」で迎えることになったからです。

希望の牧場は福島第一原発から半径20kmの警戒区域(*)にあり、そう簡単にはたどり着けないと思っていたのですが…朝6時、目が覚めたらもうそこはJR福島駅。6時半に出る路線バスに乗って、8時過ぎには南相馬市役所に到着。ここからはタクシーなど車を利用するしかありませんが、私たちは前日から南相馬に入っていたUさんの車に乗せてもらって、思いのほかすんなりと「希望の牧場」に着いてしまいました。



ところで「希望の牧場」って？ 94号、95号のごみっとでも紹介してきましたが、初めて聞く方のために、少し説明を加えます。

福島第一原発のレベル7の事故によって放出された大量の放射性物質。福島の酪農家は慈しみ育てた家畜を被曝させられ、「餓死または殺処分」のどちらかを選ばざるを得ない状況に追い込まれました。大混乱の中、着の身着のまま逃げ、警戒区域であるがゆえに戻ることができずに泣く泣く家畜を餓死させた酪農家も数多くあります。手元にある『残された動物たち～福島第一原発20キロ圏内の記録』(写真と文：太田康介)には、牛たちが牛舎で首を固定されたまま並んで餓死している写真があります。また殺処分された豚が累々と並ぶ写真があります。

現在の日本で実際に起こっている光景とはとても思えません。

そんな絶望的な光景が広がる警戒区域内にあって、元M牧場浪江農場長・吉沢正巳さんは350頭以上の牛を餓死もさせず国の殺処分命令にも応じず、「人の手によって生かす」第3の道を示して飼育し続けています。それが浪江町の「希望の牧場」です。



さて、到着した牧場ではちょうど朝の餌やりが始まったところ。重機が押し広げた乾草を、牧草フォークや雪かき用の大きなスコップで、両側に並んで待っている牛たちに均等に配る作業を手伝いました。ボランティアの仕事は、主に餌やりと通路に残された食べ残しや糞の始末なので、女性でもできます。



いわき市のマーケットから牛たちが大好きな廃棄野菜と果物が届いた♪ 写真：有馬小百合

* 2013.4.1に実施された区域再編により、希望の牧場がある浪江町立野は警戒区域から移住制限区域(年間積算線量が20ミリシーベルトを越えるおそれのある区域。一時帰宅などは可能)に変更された。



黙禱。左手に牛の死骸が…。 写真：有馬小百合

この日はりんごの絞りかす、乾草、もやし粕を与えていました。あげてもあげてもあつという間に食べてしまいます。350頭の牛は1日に5ト以上の餌を食べるそうです。もはや経済価値は一円もない牛たちを、いつまでこうして世話していくのか、気が遠くなる思いがしました。



牧場の一角には吉沢さんのお姉さんの家があります。震災の3年前に建て直したというきれいな家ですが、お姉さん家族も千葉へ避難しているので、今は吉沢さんや男性の牧場メンバーの宿舎として、またボランティアのみなさんの休憩所として使われています。私たちも南向きの広いテラスに座って、犬や猫たちと遊びながら、おにぎりや菓子パンの昼食をとりました。

時々、牛も覗きに來ます。もう出荷されることもない黒毛和牛です。「生かし続ける」と決めた強く優しい人間たちに守られて、ここは牛たちのパラダイスになっているのです。ほんとうにいいところです。ガイガーカウンター窓の2～5 $\mu\text{Sv/h}$ という数値さえ見なければ…。

午後2時を過ぎ、みんなで福島第一原発の排気筒やクレーンが見える南東側の丘へ移動しました。そこは希望の牧場の中にあつて「絶望」を突きつけられる場所です。私たちが行った11日と12日にも、瀕死の牛が牧場の目立たない場所で見つかり、重機で牛舎に運ばれてきました。手を尽くしましたが、しばらくしてどちらも死んでしまいました。こうした何十頭もの命を失つた牛が石灰を被せて集められています。放射性廃棄物となつてしまった牛の死骸は勝手に埋めることができないそうです。2時46分、その丘で黙禱をしました。



実は希望の牧場には、楢葉町で殺処分が目前だった62頭の牛を助けるために、所有者になつて育てている「やまゆりファーム」というボランティア団体が同居しています。メンバーはたったの4人。代表の岡田さんは宮城県名取市から、週4、5日、往復4時間かけて希望の牧場で牛たちやボランティアスタッフの世話をするために通っています。東京在住の方もいます。中には後述のドキュメンタリー映画「犬と猫と人間と2～動物たちの大震災」の監督・穴戸大裕さんも。

彼らもまた、吉沢さん同様「人間の糧になるために生まれてきた牛たちを、糧にできなくなったからといって殺すことはできない」と、長くて20年といわれる牛の寿命が尽きるまで面倒をみる覚悟を決めた人々たちなのです。

ほんとうはもっと書きたいことがあります。それはこの牧場で起つている奇跡の話です。必死で生きようとする牛たちと、とことん生かそうと腹をくつた人間たちが生み出す数々の奇跡です。そのあたりの話は、パソコンをお使いの方は「希望の牧場」「やまゆりファーム」「うちのとらまる」で検索してください。また、6月から全国で順次公開されるドキュメンタリー映画「犬と猫と人間と2～動物たちの大震災」を、ぜひご覧になつてください。

犬と猫と人間と2 動物たちの大震災

監督・撮影 穴戸大裕



強く優しい若き監督

6月1日からの東京
【渋谷ユーロスペース】
を皮切りに
全国で順次公開！
詳しくはホームページ
または

TEL：03-5919-1542
(平日 11:00 - 18:00)
FAX：03-5919-1543